

『挫折から』

素晴らしい結果を出したアスリート達のコメントには、感動を覚えます。とりわけ、前の大会で失敗し挫折し、精神的にどん底に落ちた経験をされた方が、「二度とあのような思いはしたくない」「あの時の悔しさをバネに頑張ってきた」と語る姿に、私は家のテレビに向かって「頑張ったね！良かったね！」と独り言を言い、拍手を送っています。時に、感極まって涙することもあります。

日々押しつぶされてしまいそうな強いプレッシャーと戦い、時にその戦いから逃げ出したい自分と向き合い、私たちが想像もできないほどの努力を重ねてきたであろう彼らの生き様は、アスリートではないけれど、一人の人間として、共感でき、そして何か一つでもそこから学んで、自分のこれからの生きる上での糧にしたいと思っています。

さて、ここからは、私ごとで恐縮ですが、60年生きてきた中でふり返ると、「あれは、自分にとっての挫折だな」というのが5回あります(多いのか少ないのかわかりませんが)。

1回目。高校時代。その地域では、進学校と言われている公立高校に進学しましたが、「上には上がいるものだ」と思い知らされました。自分なりに必死に勉強しましたが、結果がついてきませんでした。授業内容がなかなか理解できないで苦しんでいる自分の周りには、いとも簡単にそれを理解し涼しい顔している人がたくさんいました。中学時代に感じていた優位性は吹っ飛び、のたうちまわる3年間でした。高校生活で唯一それなりの成就感を味わえたのは、部活動(バレーボール)でした。

2回目。大学入試。多少の紆余曲折はありましたが、最終的には地元の教員養成大学を受験。いわゆる国立2期校でした。中学校社会の教師を目指していましたが、実力不足であえなく不合格。第2希望の小学校文類(国語、社会)も駄目で、第3希望の小学校理類(数学、理科、技術家庭)での合格。文系の自分にとっては進みたくないコースでしたが、浪人など許されない状況だったので、「とにかく、卒業して、学校の先生になればいい」との思いで入学。消去法で、卒業できる可能性がある「理科」を選択。不得手な分野の勉強に四苦八苦しました。

3回目。教員1年目。早々に学級経営につまずき、自信喪失状態に。「自分は、教師に向いていないのか?」と、悩み苦しむ。「指導力不足。指導に課題のある教員で分限処分になるのでは」と怯える日々を過ごしました。

4回目。教員11年目。2校目の中学校4年目。初めての中学校勤務でしたが、過去3年間で教科指導(理科)のコツも自分なりに獲得し、生徒指導でも「やっていける!」と、それなりに自信を持って臨んだ年度でした。

私のミッションは、2年時にほぼ学級崩壊していたクラスの担任、生徒指導部長、生徒

会顧問、男子バレーボール部の顧問でした。

このミッション、今、客観的に見ますと、負担がかなり大きく、途中で手に余り機能停止状態になるであろうとの判断はできるのですが、当時の私は、修羅場をいくつか経験してそれなりの自信を持っていたので、そして、「中学校の中では重要ポジションを頼まれた」と、意気を感じていたので、即答で「わかりました」と受けてしまいました。

1学期は、絶好調でした。学級を立て直し、どの教科の先生からも「3年B組、良くなりましたね」と言われるようになりました。生徒指導部長としても、リーダーシップを発揮して、組織的に問題解決に当たり、成果も出ていました。7月には「もうこれで大丈夫。このまま行ける！」と思うようになっていました。研究部長から、「授業研、頼む。先生の学級しかない」と言われ、「いいですよ」と承諾。

しかし、絶好調はそうそう続くものではありませんでした。夏休み後、1学期は、態度に改善が見られた男子数名が、何が原因かは不明ですが、再び反抗的になりました。露骨な授業妨害も始まりました。この状況は、一気に学級の雰囲気悪化させました。正義が通らない状態に陥りました。しっかり者の女子生徒たちは、「先生、何とかして」と目で訴えてきましたが、私にはもう彼らに立ち向かうエネルギーがないことに気づきました。1学期の中で、その当時自分が持っていた力を出し切ってしまったのです。こうなると、当時の私は、脆いものでした。自分の発する言葉には力はなく、状況は悪化する一方。そんな中での授業研。たくさんの同僚や管理職が参観している中で、男子数名が平然と授業妨害的言動を見せました。最低、最悪の公開授業でした。毎朝、起きると、「学校に行きたくない」と思うようになりましたが、一方で「一度、休んだら、そこで終わりだ。教師を辞めることになる。その後の生活はどうするんだ」という気持ちだけで学校に行きました。約半年、覇気のない弱った姿を晒し続けました。転機は、翌年の2月。あと1カ月程で卒業式という時期。「こんな状態で、卒業式を迎えていいのか。それは、あまりにもみじめではないか」と思うようになってからです。不思議なことに「1か月なら、何とかやれるかも」と、気持ちが前向きになりました。久しく感じていなかった気持ちの強さが徐々に戻ってくるのがわかりました。結果、何とか間に合いました。最後の学活では、ふがいない担任であったことを生徒達に詫言いました。そして、「でも今日、笑顔で君達の卒業に立ち会うことができ、心から『おめでとう』を言えることがうれしい。ありがとう」と話しました。

「二度とあのような思いはしたくない」その思いから「絶好調は、いつまでも続かない。順調な時に不調の備えを。1年を通してコンスタントに仕事ができなければ駄目」という仕事に対する“スタンス”を地獄のような経験から得ました。

5回目は、教頭2校目の1年目。様々な事で、自分が否定された1年でした。さすがに「もうやっていけない。これ以上この状況が続いたら自分が壊れる」と思い、「異動希望を出そう」とも考えました。最終的には、「何か、悔しいよな」という思いから踏みとどまり、何とか危機を乗り越えました。詳細は省きます。

「人生、綱渡り」「ピンチの時に『大丈夫』」と言い聞かせるのは大事だが、『これでもう大丈夫』と油断しない」自分なりに、挫折から掴んだ教訓です。